大挙してキリスト教を受け入れたことがある日本人

２０23/4/5
西九州伝道所
佐々木正明

現在は頑固に福音を拒み続けている日本人ですが、歴史を見ると大挙してキリスト教を受け入れ、福音に心を開いていた時代もあったのです。１６世紀の半ば、ザビエルをはじめとしたイエズス会の宣教師たちが、日本で宣教を開始したとき、多くの日本人はこれを大歓迎しました。その後フランシスコ会やドミニコ会などの宣教師も加わって、わずか５、６０年の間に、当時の日本の人口の５から１０パーセント程にも及ぶ、６０万人もの人々が、カトリックのキリスト教に改宗したといわれています。数字は当時の状況から考えて、非常におおまかなもので、誇張もあるのではとも思いますが、それでもこの例を見ると、日本人はキリスト教を受け入れないと、断言することはできません。

日本人が大挙してカトリックの福音を受け入れた理由

キリスト教の宣教だけに限りませんが、人々が容易に新しい宗教を受容するには、その宗教とそれをもたらした人々に対する、恐怖や嫌悪が少なく、逆に、好奇心や好感が強い場合、あるいはそれが自分たちに益をもたらすと、判断された場合です。

１６世紀の半ば、最初に日本に渡来した宣教師たちは、イエズス会に所属していました。イエズス会は、腐敗したカトリック教会への抗議運動を起こして、心ならずとも破門され、プロテスタントとなったルターなどの運動に刺激を受けて、新たに起こった改革運動でもありました。ただ、ルターたちのように破門されてしまっては、願っている改革はできないと判断し、あくまでもカトリック教会内にとどまって、これを進めて行こうという気概に溢れていました。日本に最初に来たザビエルは、ロヨラと二人でイエズス会を起こした人物で、ロヨラは地元に留まり運動を続け、ザビエルは宣教に出たのです。ですから、イエズス会そのものが、まだまだ小さな新興勢力にすぎませんでした。そのために、非常に高潔な精神を

もって宣教活動にあたったことが知られています。たとえば、スペインからの独立運動を指導して処刑されたホセ・リサールは、いまでもフィリピン随一の英雄として慕われていますが、彼はスペインが持ち込んできたカトリックをとても厳しい目で見ていました。しかしイエズス会だけは、唯一信頼できると述べています。

当時の日本人は、自分たちの宗教や政治あるいは社会生活や習慣に欠けていた、医療や教育、農事改良などを実際に見、またある意味で進んでいた西欧文化を目にし、西欧人宣教師の高潔な精神に触れ、その教えを受け入れていったのです。カトリックが教える宗教教理をつまびらかに調べて、これを受け入れたのではなく、宣教師たちの姿を見、自分たちに有益なもの、尊敬できるもの、信頼できるものと判断して、まず彼らを受け入れ、それから時間をかけて言葉の障壁を乗り越えて、教えを理解し迎え入れたわけです。いったんそのような受容の態度が出来上がると、その勢いはたちまち日本社会に広がって行きました。イエズス会の宣教姿勢は、日本人の琴線に触れたのです。ただし余談になりますが、カトリック教会内での改革を目指したイエズス会は、日本でこそ良く知られていますが、当然カトリック教会内部での立場は微妙でしたが、現在世界のカトリック教会の中で、イエズス会に所属する者の数は２万人程度で、いわゆる会派（オーダー）の中では最大で、非常に強い影響力をもっているということです。

信長が果たした役割

このカトリックの浸透に、大いに力を貸したのが信長です。天下統一を果たした信長は、大変な新しがり屋で、宣教師や彼らがもたらす異国のもの、すべてに強い関心を抱きました。さらに信長は、宣教師を通して東南アジアとの交易が可能になり、多いに儲けることが出来ると踏んで、宣教師たちを歓迎したのです。日本の大名たちの多くもまた、信長に倣って宣教師を優遇し、漁夫の利を得ようとしたのです。そのような中に、やがて、本当にカトリックの教えを受け入れる者たちも現れ、それがその大名たちの領民の改宗を促す結果に繋がって、カトリックの浸透になって行きました。

カトリックに対する迫害とその理由

大変な勢いで拡大したカトリック勢力は、まもなく非常に激しい迫害を受けるようになりました。カトリック弾圧の頂点を過ぎたころ、徳川の６代将軍に仕えて政治の実権を握った新井白石（１６５７～１７２５）は、その立場上、カトリック弾圧の実情を、最も総括的に調べることが出来たと思われる人物ですが、彼はカトリックの殉教者数を、２０万から３０万と見積もっています。現代ほど正確な統計を取ることはできなかったとは言え、かなり信頼のできる数であったと思われます。日本のカトリックの殉教者の数は、世界のカトリッ

ク教会の歴史の中でも突出したものです。とは言え、カトリックが手を組んだポルトガルとスペインが、南北アメリカ大陸やアフリカ大陸での暴虐で、死に追いやった人々の数に比べると、数十分の一、あるいは百分の幾つかというほどのものなのです。

（著者が挿入した訂正文・ 著者が数年前に調べ物は、ネット検索によるのが多く誤った情報がかなり含まれています。最近はチャット GPT 等がより正確な情報を出してくれますので、助けになっています。チャット GPT によると、新井白石がカトリックの殉教者の数について書いた文献はなく、彼に関する情報は間違いだそうです。また徳川時代のカトリックの殉教者の数も、多分数千人の範囲、多くても 1～２万だと推定されるそうです。バチカンでも正式には数万と見ているようです。しかし、多くのカトリック教会、あるいは信徒たちはこの時の殉教者の数を多めに言って、被害者であった事実を強調する傾向があります。徳川幕府が比較的少人数の殉教者でカトリックを阻止できたのは、カトリックの信仰に対する怖しい噂を流布させ、人心に底知れない恐怖感を植え付けるのに成功したこと。さらに仏教を用いて、踏み絵、壇家制度、五人組、通行手形などの制度を行き渡らせ、徹底した禁止政策を採ったことだと考えられます。）

秀吉が行った迫害

信長の短い治世のあと、天下を取った秀吉は、当初こそ信長と同じようにカトリックを優遇していましたが、その背後にスペインがいることを、早くから見抜いていました。彼の時代、かなりの数の日本人がフィリピンに渡り、フィリピンのカトリックとスペインの関係を秀吉に伝えていたからです。朝鮮に出兵し名護屋城に来ていた秀吉は、しばしばフィリピンに駐在していたスペインの総督に手紙を送り、フィリピンを攻撃し、スペイン人を追い払うと脅しをかけていました。秀吉は、インドを経てポルトガルやスペイン攻略の野望も、抱いていたのです。彼の朝鮮出兵も、これと関係があるのです。秀吉らしい性格が出ていますが、彼は新しい世界の覇者イギリスや、オランダの台頭を知らなかったのです。

そのような中で、秀吉を激怒させ、多分、２６聖人の殉教と言われる事件を引き起こさせた出来事がありました。それはフィリピンのスペイン総督が、メキシコに送った船が嵐に遭い、土佐沖に漂流して座礁したことにはじまります。調査を進めるうちに、航海長が語った自慢話が秀吉に伝えられたのです。航海長だった男は、「世界中を植民地にしているスペインに比べれば、日本など取るに足りない。スペインはまず宣教師を送り、土地の人間たちを手なずけてから軍を送り、そこを植民地にしてしまうのだ」と言い放ったのです。彼の言葉は、すでに無敵艦隊の敗北で、財政面でも破綻をきたし、植民地拡大の野望を捨てていた当時のスペインからすると、いささか的外れではあったのですが、秀吉に強烈な疑念と警戒心を起こさせるには充分でした。

そのころの日本には、すでにフランシスコ会やドミニコ会の宣教師たちも到着し、かなりなりふり構わない勝手な活動をしていました。そのために天台宗の僧侶の意見を汲み入れた秀吉は、１５８７年に伴天連追放令を出して彼らの活動を制限したのですが、宣教師たちはその命令を無視して宣教活動をしていたのです。それで秀吉は、宣教師と信徒たちに激しい怒りを発し、これを見せしめにして処刑し、カトリックの宣教にブレーキをかけ、スペインからの侵略を避けようとしたのです。ただ、秀吉の行ったキリシタン迫害は、このくらいのところで終わっています。

さらに秀吉は、戦に負けた領民の子女たちの多くが売買され、奴隷のように扱われていたことに、怒りを覚えていました。当時植民地政策を進めていた白人たちは、行くところ行くところで、このようなことをごく当たり前に行っていて、日本も例外ではなかったというだけのことです。貧しい農家の子であった秀吉の、同情と怒りも背景にあったのでしょう。ただ売買されただけでなく、かどわかしや略奪も広く行われていたのです。さらにこれらの奴隷売買には、宣教師たちが絡んでいたことにも、大いに憤りを感じていたことでしょう。ちなみに、この時奴隷として海外に売り飛ばされた日本人の数は、5万に昇ると言われていますが、こちらは被害者の日本人が「悪意を持って」水増しの数を広めているようです。この時の奴隷の売買は平戸を港として行われていましたが、当時の船の収容能力ははせいぜい数百人であり、奴隷売買が行われたであろう比較的短い期間を考慮すると、とても5万などという数には無理があります。吉田なにがしが、済州島で２０万人の韓国の人女性を慰安婦として集めたなどという、作り話に似たものだと思います。

家康が行った迫害

家康がカトリックを迫害した理由はかなり複雑で、いろいろとありますがここではその中の重要なものだけを挙げておきます。家康は１５８７年に日向灘で難破したオランダ船から救助された、ヤン・ヨーステンいうオランダ人と、ウイリアム・アダムスというイギリス人を、5大老の長として秀吉からもらい受け、彼らを非常に重用しました。二人が特に優れた能力を持っていただけでなく、オランダ、イギリスというプロテスタントの国の人間だったからです。当時ヨーロッパではカトリック勢力に衰えが見え始め、代わってプロテスタントの勢力が台頭していたという状況でした。そのために、彼らの船が豊後臼杵の小島に漂流した直後から、彼らを直ちに処刑するようにという執拗な要請が、イエズス会から幾度も出されていたのです。ところが家康はイエズス会の要請を無視し、二人をことのほか重用し、ウイリアム・アダムスには進んだ西洋の学問を教えさせたり、西洋型の大型船を作らせたりし、その働きを評価して三浦半島に領地を与え、三浦按針（三浦の水先案内）という日本名を名乗らせ、帯刀を許し、旗本とし取り立ててさえいます。ヤン・ヨーステンには貿易の能

力を認め、家康の東南アジア交易の責任を持たせ、現在の東京駅の東側に広大な家屋を与えています。それが現在の東京駅の東側、八重洲口という名の由来になってるほどです。

イギリス人とオランダ人の二人を処刑するようにという、イエズス会の要請は当然と言えば当然です。憎きプロテスタントの人間だからです。当時のヨーロッパで起きていたカトリックとプロテスタントの争いは熾烈で、まさに、血で血を洗う様相でした。それだけでなく、彼らは優れた船乗りとして、当然カトリック国が世界中で行ってきた、植民地政策とそれにまつわるありとあらゆる非人道的な行為を知っていました。それを、イエズス会の宣教師たちも、日本の為政者たちに知られたくなかったからです。ところがこの二人はただ旧勢力のカトリック国が、二つのアメリカ大陸でおこなっていたことを十分知っていただけではなく、個人的にも強い敵対心を持って、スペインやポルトガルがやっていたことを語ったと、想像できるのです。というのは、オランダとイギリスはプロテスタント国同士として協力して、カトリック国だったポルトガルやスペインが、アフリカに作った植民地を荒らし、その船団を襲い略奪するために、つまり海賊行為をさせるために、5隻の船団で船出をさせたのです。当時のイギリスもオランダも、海賊行為を当然のこととして支援し、その略奪品をもって国庫を潤していたのです。ところがまもなく、彼らはスペインの艦隊とポルトガルの艦隊に相次いで遭遇し、それぞれ一隻の船を失った挙句、もう一隻が迷子になって落伍し、母国に戻ってしまいました。残った2隻は、カトリック国からの略奪をあきらめ、代わりに喜望峰を回って「黄金の国ジャパン」に行き、その黄金を略奪しようと考えたのです。ところが一隻は太平洋上で遭難し、日本までたどり着いたのは一隻だけだったというわけです。

家康は、初めの内は彼らを単なる海賊とみなしていましたが、謁見しているうちに、彼らが非常に有能なこと、また、カトリックの情勢に非常にたけていて、「単なる海賊」ではないと考えるようになったのです。家康はこの二人がもたらす情報によって、イエズス会を始めとするカトリック宣教師たちの危険性を、十分に理解することが出来たはずです。カトリックの宣教と植民地政策が強く繋がった理由は、ローマ教皇の取った策略にありました。ローマ教皇は、カトリックの大国だったポルトガルとスペインに対し、世界に進出して植民地を作ることを許可したことも、カトリックに改宗しない土地の人々の、殺傷与奪の権を与えていたことも、当然知っていました。彼らの貿易は、キリスト教の布教を認めた国とだけという条件も理解していたはずです。そのようにして、カトリックは勢力を伸ばそうとしたのです。そのために、宣教師活動と植民地制度が表裏一体となり、日本のカトリック弾圧に繋がったというわけです。

また家康を怒らせた他の要因には、関ヶ原の戦いのとき、キリシタンの多くが秀頼側に付いたこと、キリシタン大名の中に、領地内の神社仏閣を破壊したり、領地の一部をカトリックの修道会に献上する者たちが現れたりしたことがありました。そのような土地は、当然ス

ペインに所属するとみなされました。これは為政者として認められないことでした。さらに、キリシタン大名の有馬晴信が長崎代官長谷川藤弘を毒殺しようとしたこと、また有馬晴信の報償に関わって、キリシタンの岡本大八が家康の印章を偽造したことなども、家康のキリシタンに対する疑念を深めたことが考えられます。また、関ヶ原で敗戦した側の多くの子女が、主に東南アジアに奴隷として売られていたこと、これに宣教師たちが絡んでいたことが、暴露されてきたという事情もありました。スペインやポルトガルにしてみれば、彼らが世界中で行っていた何ら特別ではない奴隷売買ですが、日本の為政者たちは、西欧キリスト教国とは異なった国家観と、人権意識を持っていたのです。

家康がカトリックを快く思わず、これを止めようとしていたことは良く知られていますが、彼が敷いた禁止令は、あまり厳格ではありませんでした。それが厳しくなったのは、マカオで日本の船とポルトガルの船が争いを起こし、日本の船員 60 名が殺された事件があってからです。ただしそれでも、家康が実際に弾圧の手を伸ばすことは、あまりありませんでした。実際に過酷な弾圧、迫害を行ったのは家康の後を継いだ 2 代将軍秀忠、さらに 3 代将軍家光になってからのことです。また、通商とキリスト教の宣教が抱き合わせになっていなかった、プロテスタントの国オランダとは、いわゆる鎖国の間でも短い断絶期間をのぞいては、通商が行われていたのは良く知られています。

伊達政宗の場合

秀吉や家康と肩を並べるほどの権力を握っていた、伊達政宗もまたスペインやローマ教皇との通商を望み、あたかも自分もキリシタンになったかのように装い、独自に特使を送ったりしたほどですが、スペイン王もローマ法王も正宗との交易に興味を示さなかったことを怒り、自分の領地内での宣教を禁じ、従わなかった信徒たちを処刑しています。彼もまた、カトリックの宣教がスペインの植民地政策の隠れ蓑であることを聞き及んで、さらに迫害を激しくしています。

日本の為政者は、キリスト教という宗教を迫害したのではない

日本の歴史を見ると、宗教が大きな争いの主な理由になったことはありません。宗教はあくまでも政治の付随物で、主役になることはなかったのです。そこが西欧との大きな違いです。カトリックの迫害も同じことです。カトリックという宗教を迫害したのではなく、スペインの植民地政策への徹底した対抗手段だったのです。この迫害の手先として利用されたのが仏教でした。徳川幕府は檀家制度や五人組や宗門帳などをうまく用いて、キリシタンの取り締まりと迫害を継続したのです。この仏教優遇処置により懐を温め、特権意識を強めた

仏教寺院は、明治になって国家神道が定められると、たちまちその優遇処置から外されただけでなく、廃仏毀釈という国家からの迫害に遭うのです。日本のカトリックには、被害者意識の塊みたいなところがありますが、迫害されたのはカトリックだけではなかったのです。宗教は政治に利用されるのが、日本の常なのです。

もう一つの迫害理由

　最初のころこそ、日本の為政者たちは外国との貿易に利用して、利潤を増やすことが出来ると踏んで、カトリックの宣教師たちを優遇していましたが、カトリックに帰依する者が爆発的に増えるのを見て、恐れを感じるようになったと考えられます。とくに、キリシタンたちは死んでも永遠の命があると信じ、信仰のためには命を捨てるのもいとわないことが、広く知られるようになりました。そのような信仰で、唯一絶対の神を信じ、その教えに従うとすると、とんでもない状況が想定されたのです。秀吉も家康も、キリスト教の教えを深く学んでこれを拒絶迫害したのではありませんでしたが、絶対の神に対する絶対の信頼と服従、そして死をも恐れずに戦うパライソ（天国）への希望を理解し、これを非常に恐れたのです。

日本は昔から、天皇を中心とした朝廷の勢力が日本を治めていましたが、平安時代の後期になると、武力をもって彼らに仕えていた者たちの勢力が増し、武家と言われる者たちが政治の実権を握るようになりました。ところが武家は政治の実権を握った後も、朝廷の象徴的権威を認め、自分たちをこの朝廷に仕える武士集団と認め、自分たちの権威のよりどころを朝廷からの承認としてきたのです。例えば将軍と言う名も、征夷大将軍と言う朝廷から賜る武家の最高権威という意味だったのです。時には武家集団が朝廷の権威を軽んじ、力で朝廷を脅したこともありましたし、天皇が直接武家の上に立って政治を行おうとしたこともありましたが、日本はこの二つの勢力の微妙な力関係の上に成り立っていたのです。

　しかしここに、天皇の象徴的権威や武家の実質的な力を上回る、絶対の神の存在を認め、その絶対の意思に従うことを信仰の極みと考え、パライソの存在を信じて死をも恐れない一大集団が出来上がってしまうと、日本の治世に大混乱が起こることが、容易に予想されました。秀吉も家康も、かつて信長が一向一揆の反抗に手を焼き、これを最も恐れいたことを良く知っていました。一向一揆は、一向宗と呼ばれた浄土真宗本願寺派の信徒たちが起こした、抵抗運動で、さすがの信長も、これには手を焼いたのです。キリシタンはまったく違う宗教集団でありながら、その信仰形態は一向宗の人々の信仰によく似ていたのです。

明治維新当時のキリスト教評価

　日本の為政者たちは、カトリックは国益を損なうものと断じ、これを抹殺するために、あ

らゆる過酷な手を尽くしました。その歴史が２５０年以上も続き、明治維新に至りますが、ここに及んでもキリスト教に対する疑いは、弱まることがないばかりか、かえって強くなっていきました。それは西欧の力のバランスがプロテスタントの国々に移ったとはいえ、そのプロテスタントの国々も植民地政策をさらに強化し、国策として進め、世界中で人道に悖ることを平気でやり続けていたからです。幕末から明治にかけて日本に関係を迫っていた国々もみな、植民地政策をとっていました。そのため明治政府は、信教の自由を掲げながら、キリスト教だけは明治６年に至るまで禁止していました。その禁止が解けたのも、西欧列強の圧力に負けただけのことであり、明治政府の本意ではありませんでした。

胡散臭い宗教キリスト教

　こうしてキリスト教は、徳川幕府以来４００年以上の長い間、胡散臭い宗教、怪しげな宗教、とんでもない邪教、面妖な宗旨、恐ろしく忌まわしいものとされてきたのです。その間、第二次世界大戦後のマッカーサーによる、キリスト教優遇処置によるわずかな期間だけは例外と言えますが、これさえも、キリスト教に対する胡散臭さを、消すことはできませんでした。現代でも、多くの日本人はキリスト教を好意的にはとらえていますが、その心底には、散々悪を重ねてきた西欧キリスト教に対する根深い疑いと、徹底した迫害が 300 年以上も続いたために生じた恐れが潜んでいるために、なかなか福音を福音として受け入れることはできないのです。

　１６世紀の中ころには、歓呼してキリスト教を迎えた日本人でしたが、徳川幕府の徹底した迫害を見させられ、仏教寺院を用いた反キリスト教政策と、キリスト教を貶める作り話の流布などによる洗脳によって、キリスト教を恐るべき、面妖な宗教として無視、冷遇するようになったのです。このような感覚が、実に１６世紀の後半から現代に至るまで、日本人の心に染み込んできたのです。

　多くの日本人は、日本におけるキリシタンの迫害には同情しています。しかし同時に、暗黒時代のカトリック教会の腐敗をはじめ、西欧キリスト教の醜い姿を、世界史という学校教育で散々教えられ、それを覚えているのです。

キリスト教に対する抵抗勢力

　そのうえ日本には、キリスト教に対抗し続ける宗教的精神土壌があるのです。先に述べたように、キリスト教に対抗してきた宗教的精神土壌には、仏教、ヒンズー教、モハメット教等があります。これらの宗教が強い地域でのキリスト教の宣教は、みな困難を極めています。最近は仏教色の強い地域での宣教に、少しばかり明るい兆しが見えているようにも感じま

すが、まだまだです。

日本には古来の神道があり、日本人の精神の柱となってきました。またそのシャーマニスティックな一面と仏教が結びついて、かなり強い仏教的側面を持っています。これらが、日本人のアイデンティティ、すなわち、自分は日本人であるという共通の感覚となっていて、社会構造のあらゆる分野局面に及び、日本人の心を支配しているために、キリスト教を受け入れるのは容易ではないのです。たとえ、一時的にキリスト教を受け入れ、福音を聞き入れる人が現れたとしても、その人の中の日本人としての感覚は、やがて、その人を普通の日本人に呼び戻してしまうのです。

神道は、まさに日本独自の特異な宗教であり、日本人の精神の根底になっているものです。たとえ仏教を捨てることがあっても、日本は神道を捨てることはあり得ないでしょう。明治の初めの廃仏毀釈がこれを証明しています。日本人と神道感覚は一つであり、神道はもはや宗教ではなく、日本固有の文化となっているのです。少なくても、明治以降の為政者たちは、そのような感覚と主張で国を治めてきたのであり、大多数の日本人が、それを受け入れてきたのです。現代でも国の祭事は神道で行われ、地方自治体の行事でも神道の形式で行われます。それは信教の自由と政教分離を謳う、日本国憲法に違反するものだと訴えても、必ず、原告側が敗訴するのです。日本人の精神の土台と柱は神道であり、それが日本の文化そのものであり、儒教も仏教もその他あらゆる宗教も、信教の自由といううわべの飾りつけとして、存在を許されているに過ぎないのです。

その上、全体的に見て、日本は共同体意識がとても高い社会ですが、日本にもたらされたキリスト教は個人主義の傾向非常に強いという問題があります。神道では個人の信仰や所属を問うことはまずありません。それぞれの信仰表現は、個人的な告白や所属よりも、共同体的なものとなります。日本人であるならば、誰でも生まれたときに自動的にその地域の神社の会員、すなわち氏子とみなされます。その信仰表現は、地域の神社の祭りに参加する、共同体的行動で行われるのです。日本に持ち込まれたキリスト教は、最初から最後まで個人主義であるため、日本人の共同体志向の生活様式になじめず、それを無視したものとなるのです。それで多くの日本人は、「個人としては、キリスト教は良いものだと考えるけれど、共同体の一員としては、キリスト教徒であり続けることは不可能だ」と感じているのです。

キリスト教無しにここまでやってきた

現在多くの日本人は、「自分たちはキリスト教無しにここまでやってきた。日本が西欧キリスト教国に後れを取っているとは思わない。どうして、キリスト教を受け入れる必要があるのか」、「どんなメリットがあるのか」と考えています。現代の日本人は 40 年前、あるい

は５０年ほど前の、傲慢な楽観主義の日本人ではありません。Japan as number One 等という言葉に踊らされて、空しい優越感に浸っていた時代は、とうの昔に過ぎ去りました。それでも、日本人の多くは、様々な点で日本が立ち遅れていることを認めながらも、西欧諸国に勝るとも劣らない高度な文明を持ち、経済的にも科学技術の面においても、国力全体においても、かなり良くやっていると考えています。

日本はキリスト教を受け入れないまま、ここまでやってきました。西欧諸国は何百年間も、あるいは千年以上もキリスト教を奉じていながら、あの程度で留まっているのです。あの程度の文化を形成し、あの程度の発展を遂げ、あの程度の国家と社会を築き上げているだけです。日本はキリスト教を持たないまま、この程度の文化を形成し、これだけの発展を遂げているのです。その精神文化は、優しい人柄、平和な社会、高度な教育を生み出し、多くのキリスト教国といわれる国々よりも暮らしやすい、平等を旨とする国を作り上げています。

もちろんたくさんの欠点があり、未発達な側面があり、醜い出来事も日常茶碗事です。それでも日本人は、強い愛国心を持っています。それは世界中の人々が持つような、表層に現れてくる愛国心や、政府に植え付けられた愛国心ではありません。実際、愛国心という言葉さえ、現代日本人の多くには、嫌われているのが現実です。日の丸は疎まれ、きみが代はできるだけ歌わないという人が多いのです。熱狂的に国歌を歌い国旗を掲揚する国々とは違うのです。しかし国旗から身を引き、国歌に口をつぐむ日本人でありながら、その精神の根底には非常に強固な愛国心が、気付かれないままに潜んでいます。多くの日本人はそれに気づきませんが、海外に出てみると、突然、自分が非常に日本を愛していることに気づくのです。その「日本人」が、キリスト教を胡散臭く感じさせてしまうのです。

キリスト教の侵略に耐えてきた

最近、日本にはある種の右翼化傾向がみられます。右翼的な日本の歴史理解には、日本はキリスト教の侵略に耐えてきたという、共通の意識があります。それは秀吉の時代から始まって、明治の開国の時代、そして昭和の第二次大戦直前まで、キリスト教国の植民地政策に対抗して悪戦苦闘してきたからです。徳川の時代から、一般大衆は為政者が採った迫害と洗脳によって、キリスト教に対する強い恐怖心を、植え付けられてきたのです。

西欧諸国が新た植民地を作ることは、第二次大戦の直前の国際会議で廃止されましたが、西欧諸国の宗主国的な感覚は、第二次世界大戦とその後の東京裁判や GHQ の時代に、直接的に繋がって行きました。GHQ は徹底した政策をとり、日本が二度と再びアメリカに敵対しないように、いくつかの策を弄しています。そのうちの一つが War Guilt Information Program というもので、日本人を戦争犯罪者としての自責の念に陥れ、日本という国に失望

させるための、特殊な情報操作工作でした。日本人が真珠湾を攻撃し戦争を仕掛けたというでっち上げを宣伝し、国際法に反した東京裁判を行って、多くの偽りの戦犯を作りあげて処刑しました。こうして日本軍の残虐さを誇張する一方、連合軍の人権や自由を重んじる民主主義の姿を、美化する情報を流布し続けました。日本は無条件降伏で昭和２０年８月１５日をもって終戦になったと考えていますが、世界的には９月２日とされていて、ソ連の参戦も、正当化されるのです。そしてアメリカは、日本に対してまだまだ戦いを続けていたのです。

GHQ が War guilt Information program に沿って、焚書（実際に書物を焼いたかどうかは別として）にした、日本の書籍は実に広範囲に亘り、七千七百六九の文献に及びます。アメリカは、徹底的に日本人の自尊心を打ち砕き、二度と再びアメリカとことを構えようなどとは、思わないように、いくらかでも日本の美を謳い、文化を称える様な書物は、みな禁書にして没収し、処分したのです。これはけっして、マッカーサーに代表される GHQ だけの政策ではなく、アメリカ本国の政策でした。

アメリカは、アジアの小国日本がどんどん強力になっていくのを喜ばず、これを何とかして打ちのめそうと、戦争開始の機会を伺って様々な工作を弄していました。アメリカはなんとか日本に、戦争を仕掛けてほしかったのです。それはすでに激しい戦いになっていたヨーロッパ戦線に、参戦してくれるようにと言う強い要請が、イギリスから来ていたからです。アメリカ大統領のルーズベルトは、先の大統領選挙の公約で、ヨーロッパ戦線には加わらないと公約していたために、それが出来なかったのです。それで３国同盟でイギリスの敵となっていた日本が、アメリカに戦争を仕掛けてくれるならば、公に日本と戦争が可能になり、加えてヨーロッパ戦線にも加わることが出来る踏んで、日本がアメリカの挑発に乗ってアメリカを攻撃せずにはおれないように仕組んだのです。

日本はアメリカの挑発に乗せられて真珠湾攻撃を仕掛けました。アメリカはこれを宣戦布告無しの卑怯な奇襲攻撃であったと宣伝し、日本に対する戦いを正当化し、ヨーロッパ戦線にも加わることが出来たのです。そもそも、宣戦布告をして外国と戦うなどということ自体が、当時もありえないことだったのです。しかもアメリカは、日本の真珠湾攻撃については、予めよく知っていました。日本の暗号文はすべて解読されていたからです。それをあえて、アメリカ側には宣戦布告が届かなかったという、嘘の話も作りあげていたのです。それでアメリカは、自国民には真珠湾攻撃を卑怯な奇襲攻撃であったと宣伝し、日本に対する敵対意識、復讐攻撃の気炎を盛り上げることが出来、Remember Pearl harbor の合言葉も広められたのです。アメリカはこの合言葉を高く掲げ、日本人に対する憎しみを作りあげ、自分たちの無差別爆撃や原爆投下を正当化しているのです。いまでこそ、多くの都市を無差別に爆撃し、多くの一般市民を殺したアメリカの戦争犯罪、あるいは原爆投下の戦争犯罪も、糾弾されるようになってきましたが、つい先ごろまでは、アメリカの偽情報に騙され、アメリ

カの犯罪を追及する声はほとんど聞こえませんでした。

とはいえ、実際に彼らは戦後の荒廃の中の日本を、熱心に助け、日本の復興に力を貸したのも事実です。戦後の民主主義教育や、フルブライトを始めとする留学制度も、大いに日本を助けました。またマッカーサーがフィリピンで、陸軍司令長官としてやろうと計画していながらできなかった、農地改革と財閥解体を、日本で実行してくれたことも、日本国民のやる気を起こさせ、復興に寄与したことも大切な事実です。日本に対して強い憎しみを抱いて、占領軍兵士として日本に上陸したアメリカ人たちの多くが、実際に見る日本人の優しさや、従順さ、正直さ、謙遜さに驚いて、日本が好きになったという話もたくさんあります。

さらにマッカーサーは、日本をキリスト教化しようという考えも持っていました。そのために、日本のキリスト教会を優遇し、教会をアメリカからの救援物資の配給所にしたり、母国から３０００人もの宣教師を呼び寄せ、１千万冊に及ぶ聖書の分冊の配布をしたりもしています。筆者のような戦後育ちの日本人の多くは、アメリカからの救援物資によって、命をつないできました。代用食が当たり前で、欠食児童が沢山いたとき、アメリカの支援で学校給食が始まりました。脱脂粉乳も、大きなツナの缶詰も、コッペパンも、シラミやノミや腹の中の虫を駆除する薬も、アメリカからもらいました。実際、このようなマッカーサーの政策の下、一般の日本人の、アメリカとその文化の土台となっている、キリスト教に対する好感度が増したのは事実です。ただそのキリスト教に対する日本人の好感も、ベトナム戦争を境にたちまちのうちに覚めて行きました。

それから、６５年間にわたって極秘扱いにされていた、アメリカの戦争の記録が公開されるに及んで、少しずつ、真実が明らかにされるようになってきたのです。もっともこの戦争の記録は膨大なものであり、ただ閲覧が可能になったとはいえ、それを調べる人たちの数も限られ、その中から必要な情報の記録を見つけ出し、さらに調べるのは、気も遠くなるような作業であるために、まさにぼちぼちと真実が明らかにされてくるだけで、まだまだ真相は闇の中というのが多いのです。

日本以外の異邦人がキリスト教を受け入れる理由

日本以外でも、モハメット教やヒンズー教、あるいは仏教の強い国々においての宣教は困難ですが、その他の国々では大いに進展しています。それはキリスト教に対抗する力となる、アイデンティティがないためです。大航海時代のカトリックの宣教も、ウイリアム・カーレーに始まるプロテスタント国の宣教の多くも、まだ国家として統一されていない、部族の寄せ集めにすぎない人々に対する宣教でした。当然、植民地主義者に対抗するだけの戦闘能力も、経済力も思想も信念もなく、容易に侵略されてしまいました。また、多くは汎神論や多

神論の中にあって、シャーマニズムに埋没して生活していて、キリスト教の神学的強固さに、対抗できる宗教的精神土壌もなかったのです。

これらの異邦人の多くは、現代に至ってもまだ、部族集団の意識が強いうえ、教育が遅れているため、自分たちの国の、あるいは民族の歴史を知りません。自分たちの部族や国家が、西欧キリスト教国の白人たちに、いかに差別され、弾圧され、搾取されてきたかを知らないのです。宗主国は自分たちに都合の良い歴史を捏造して、植民地国で教えます。（日本でもGHQ がそれをやりました。そして今でも、多くの日本人がそれを信じています。）植民地の人々はそれに騙されただけでなく、進んだ西欧の科学的文化生活と豊かさに憧れ、率先してそれを受け入れようとしているのです。キリスト教の福音も、それが理解されてではなく、西欧の優れた文化の一つとして便利な機械文明、技術文明と同じく、精神技術文明として受け入れられているわけです。ラテン・アメリカやフィリピンの人々が、ポルトガルやスペインに植民地にされ、過酷な生活を強いられながら、彼らの宗教であったカトリックを受け入れているのは、かつての彼らの宗教精神の貧しさと、思考能力の弱さを示しています。

たとえば植民地主義国の多くは、カトリックとプロテスタントの差別はなく、現地の女性を強姦して、生まれてきた混血児に特別な地位と名誉と権力と金銭的特権を与えた上で、彼らを自分たちの手先として用いました。民族的な誇りも、高度な宗教や哲学も、戦闘力も、国家としての一致団結もまだできていない人々の間では、この植民地政策は大いに成功したと言われています。中には自分の娘たちを進んで提供する親もいましたし、自分で進んで混血児を産もうとする女性も少なくなかったのです。

現在の福音派の宣教は、美しい音楽や魅力的なエンターテインメント、あるいは豊かな生活様式を用いて、まず人々の心をとらえようとします。アメリカやイギリス、あるいは西欧諸国の美しい面を見せて、キリスト教の宣伝にしようとしているのです。ペンテコステ派の宣教はそれに加えて、シャーマニズム信仰より力強い、人間性の回復や社会改革、あるいは癒しの福音として、さらには繁栄をもたらす福音として、受け入れられようとしているのです。要するに、現代の異邦人たちは、キリスト教の教え、その福音を、自分たちが今まで保持してきた宗教文化や習慣、あるいは社会生活よりも優れたものと判断して、喜んで採り入れているのです。

キリスト教に良いものを見つけられない日本人

日本人の多くは、徳川時代以降、キリスト教に有益なもの見つけることができませんでした。たとえ見つけたとしても、有害なものと天秤に乗せて比べてみると、圧倒的に有害なものが多く、また大きかったのです。

たとえば、キリスト教の宣教師たちは、西欧の進んだ文化をたくさん持ってきました。学校や病院、あるいは厚生施設の多くは、これらの宣教師の残した遺産であることは、ほとんどの日本人が認めています。また宣教師たちの規律ある生活態度も、尊敬の目で見られています。ところが、その同じ宣教師が、日本の文化に触れると、たちまち分からず屋になり、声高にそれを非難し糾弾し断罪します。日本の文化の多くの側面は、ほとんど日本古来の宗教と深く関わっているために、西欧の文化や生活習慣に合わせ、西欧の感覚と考え方で形成されたキリスト教とは、協調できないことが多いのです。特に、徹底して偶像礼拝を嫌うプロテスタントの宣教師は、日本の文化の多くの面を偶像礼拝に結び付けて非難しがちなので、寛容性が乏しいと見られて嫌われます。それは、日本人の宗教と精神文化を理解しようともしない上から目線の態度だと、静かにそして冷たく、断固と拒絶されてしまいます。そして、そのような日本人の反発は、どう評価してみても、正当と言わざるを得ません。西欧キリスト教の神学が間違っているのです。彼らの聖書解釈に重大な欠点があるのです。

キリスト教は良い宗教だけど・・・

多くの日本人はまた、キリスト教の教えそのものを良いものと判断しています。ところがそれを自分が受け入れることには大いに躊躇し、自分の周囲の者がそれを受け入れることにも、面倒なことにならなければいいがと眉をひそめます。なぜなら、キリスト教の教えを実行しようとすると、それは西欧の生活や考え方を、無理矢理に日本の文化の中で実行することになるからです。それは四角いマスの中で、三角の球を転がそうとするようなものです。日曜日ごとに教会に行くことは、日本の文化になじみません。什一献金も神聖政治下で国の祭りごとを行っていた、古代のイスラエルで定められた法律であり、政教分離で国家に納める税金と、それぞれの宗教団体に自由に納める献金は、厳密に区別される現代日本の税制とに合致しません。仏教の行事を嫌い、神道の祭事を避けるのも、周囲の人たちとの協調を大切にする日本人には苦痛です。なんでも白黒で判断しがちな宣教師は、灰色の考え方をする日本人共同体の中に、いつもいざこざの種をまき散らしています。要するに、教えられるとおりの教会生活を送ろうとすると、普通の日本人では居られなくなるのです。

無宗教を自認する日本人の多くは、自分がまじめに宗教を持つとするなら、キリスト教にすると言っています。少なくても、キリストが教えた高い倫理や、高度に整えられたキリスト教神学に対しては、尊敬の念を抱いているのです。ところが、それができないのは、教会の教えについて行けないためです。教会を離れて、現代版隠れキリシタンとなっている日本人は、教会に通い続けている日本人クリスチャンよりも、多いと思われるほどです。

要するに、日本人はキリスト教を理解していないのです。聖書の教えも知らないのです。

そのくせ、キリスト教は優れた文化を持つ西欧から来たものだから、すくなくても、ヒンズー教やモハメット教や仏教よりは良いものに違いないと、感じているだけのことです。ところが実際にキリスト教に触れると、日本の文化習慣とはひどくかけ離れた世界で、そちらの世界に合うように形成された宗教であることに驚き、これでは日本でやっていけないと思わされてしまうのです。プロテスタント教会は聖書の教えを大切にすると教えます。ところが素直に、まじめに、聖書を読んでみると、西欧渡りのキリスト教が教えていることと、聖書の教えとの間の、大きなギャップに衝撃を受けることになるのです。

特に日本人の多くは、キリストが教えるおおらかな天の父の愛と寛容には、強い魅力を感じています。自分たちの本能的な意識の中にある、気高く尊い方に対する微かな思いと、共通点があるからです。ところが、旧約聖書の教えをかたくなに神の言葉として信じ、それを日本人にも押し付けようとする教会の態度には、とてもついていけません。教会の教えを守ろうとすると、まともな社会生活が出来ないのです。だから日本には、密に天の父を崇めながら、教会には寄り付かない、隠れクリスチャンが多いのです。教会の教えを優先して、社会生活を犠牲にする、「献身的」なクリスチャンには、なかなかなれないからです。

日本以外の異邦人の国々でも、自分たちの強固な宗教とそれに伴う教えを持ち、民族として、あるいは国家としての一体感を持っているもの、あるいはある程度の文明を保持し、民族としての誇り、国家への忠誠心を持っている国では、キリスト教の宣教は、まだまだ苦戦を強いられることでしょう。キリスト教に対する反対感情は、日本ほど強いものにはならないとしても、それなりの障壁とはなり続けることでしょう。一方、自分の部族への誇りも、国家への忠誠心もなく、強い宗教的背景も持たず、西欧的な文化や経済力に魅力を感じている人々の住む地域では、キリスト教の宣教はますます力を増していくことでしょう。

ところで、歴史的にはキリスト教文化の中にいた、西欧の国々はどうなることでしょう。開発途上国の人々とは異なって、これらの国々では、現在、カトリックとプロテスタントの違いを超えて、伝統的な教会の権威とその教えに対する反抗精神が強くなっています。あるいは教会やキリスト教そのものに対する、無関心が強くなっています。荘厳な大聖堂が物置と化していることが多と聞きます。彼らはキリスト教文化に生きてきましたが、キリスト教に対して失望しているのです。それは伝統的な権威主義な教会が、彼らの現代的な人生の問いに答えられないでいるからです。何世代にもわたってクリスチャン文化の中に生き、クリスチャン家庭のぬるま湯につかって育って来た、多くの若者が失望のあまり、「静かにそして冷ややかに教会を去っているのです。

これらの国々の教会を捨てた人々は、今や、ある意味で、日本人の感覚に近い感覚を持つようになってきています。彼らは聖書の教えの多くが、自分たちの生活に合わないものである

ことを、たくさん体験してきました。古い皮袋ばかりを大切にする教会の姿勢に、うんざりしているのです。キリストの天の父の精神の素直さには同意できます。しかし、神の権威や聖書の権威を自分の手にする、教会には納得できません。彼らは教会が教える天地創造の神には、教会共々失望しているのです。それでいながら、彼らは完全な無神論者にはなれないままでいます。彼らは、彼らの心にある宗教意識、神意識、そして文字で書かれた律法ではなく、心に記された律法、神に似せて造られた本来の人間の本性に通じる、異邦人の良心に従うようになってきたのです。

彼らは今や、日本人のように感じ、日本人のように考えるようになっているのです。自分の自由な人間性、人間本来の姿から、もう一度世界を見直し、世界観も神観も人生観も、聖の教えでからではなく、人間性から考察し直そうとしているのです。いわゆる、教会や聖書から派生する演繹法的な考え方から、人間性を見直し、社会の出来事一つ一つから帰納法的に考える方向に移っているのです。それは、まさに、異邦人の神学と筆者が呼ぶものと、同じ方向を向いているのです。同じ方向に向いていても、同じところに辿り着くかどうかは全く分かりません。筆者は、帰納法的に考えることの大切さも主張します。しかし、帰納法的考え方では、絶対に解決できないこともあるのです。この問題を議論するためには、徹頭徹尾聖書の権威に基づきながら、聖書もその記述から帰納法的に論じ、かつ聖書や教会から離れた一般社会の事柄からも、帰納法を用いて学ばなければなりません。演繹法の論が及ばないことに対しては、帰納法を正ししく、補佐的に用いるなければなりません。たとえば、神はその絶対の権威をもって人間の生きるべき道をお定めになった。それに従うのが、神に造られた人間の道である。というのが演繹法的な議論です。でも、神の律法が具体的に提示される時には、必ず、その時、その場、その文かという条件もとで、行われます。その具体的時や場、そして文化などの条件を一つ一つ見つけ出し、考慮した上で、それを資料として議論を重ねて行き、演繹的考察では行きつくことが出来なかったところまで、行きつこうとするのが帰納法な考え方です。それに対し、教会を離れつつある西欧文化の人達のほとんどは、聖書を放棄して、演繹的な議論を無視して、それをやろうとしているのです。でも彼らが、自分たちの聖書主義から、あるいはキリスト教の伝統から脱却した上で、素直にそして真面目に、聖書本来の教えを学ぶ姿勢を取り戻すならば、期待が持てるかもしれません。

彼らが強権的な教会を離れ、伝統的なユダヤ教的感覚の律法主義を捨て、ユダヤ人が誕生する前の、つまり律法の前の人間の姿を記録している創世記を学び、特に、天地創造と人間の創造について正しく理解するなら、伝統的なキリスト教徒には戻れないとしても、優しく、太っ腹で、人間の弱さや足りなさに徹底して付き合ってくださる、キリストがお教えになった「天の父」を信じ信頼する、「天の父教」の信徒にはなれるはずです。それは日本人と同じだと思えるのです。彼らは伝統的なキリスト教徒にはなれません。しかし、本物のキリスト信徒、聖書の信徒にはなれるのです。